

## クリスマスを祝う心

くまのアーネストおじさんの家に、身寄りのない小さなセレスティーナが引き取られてきました。クリスマスです。アーネストはセレスティーナを連れて森にツリーにするモミの木を探しに出かけました。すると小さな曲がった木が一本残っているだけでした。こんなみすぼらしい木では、クリスマスツリーの役には立たないと思われたからでしょう。

ところが小さなセレスティーナは、森の中にぽつんと取り残されたこのモミの木に、心が惹かれました。「わたしは、この小さな木のそばでクリスマスをしたいわ」そこでおじさんはセレスティーナのために、大勢の友だちを森の中に招いてパーティーを上げてあげようと思いました。でもセレスティーナは強く頼みました。

「アーネストおじさん。わたしは本物の雪の中でクリスマスをお祝いしたいの。おじさんと二人きりでね。二人だけでいいの。ローソクに火をつけて、空には本物のお星さま」セレスティーナは一人ぽっちで過してきた自分と、取り残された小さな曲がったモミの木を重ね合わせて、離れられなくなったのでしょうか。だから愛するおじさんと二人きりで、この木と一緒にクリスマスを祝いたいと思ったのです。

(ガブリエル・バンサンの絵本より)

クリスマスの主役は、ベツレヘムの宿屋の家畜小屋で、ひっそりと生まれ、飼い葉桶に寝かされた救い主です。ユダヤの住民は皆出身地に戻って、人口登録を命じられました。町の宿屋は満員。ヨセフには部屋を融通してもらおうお金も肩書もありません。主人の好意で家畜小屋に泊めてもらうのが精一杯でした。

その夜にイエスさまは誕生し、飼い葉桶に寝かされました。みじめな出産です。年若いマリアはどんなに不安だったことか、またヨセフは妻子に十分なことをしてやれない自分の不甲斐なさに、やるせない腹立ちをかかえていたことでしょう。しかし飼い葉桶の中のこの嬰兒の笑顔は、柔和と希望に輝いています。二人にとってこれが何よりの救いだったに違いありません。



ダビデ王の家柄の末とはいえヨセフはナザレの村大工です。マリアについては両親が誰か、聖書に何も記されていません。幼くして死別し、親戚に引き取られて育ったのでしょう。15、6才でヨセフと婚約し、自分の家庭を持てる幸せを心待ちしていました。

ところが天使から突然、神の子の母になるようにとのお告げを受けたのです。マリアは戸惑い、考え込みました。救い主となるお方を産み育てるとはいえ、そもそも男を知らずに子を生むなどありえません。不倫の女とそしられます。ヨセフとの結婚はどうなってしまうのでしょうか。

しかし彼女は「お言葉どおり、この身に成りますように」と神の御心に聞き従う決心をしました。するとヨセフも、驚き悩みましたが、彼女と同じく神を信じて受け入れ、みごとに夫と父親の役割を果たしてくれたのです。マリアは幸せな家庭を失いませんでした。

野宿して羊の番をしていた貧しい羊飼いたちが、天使に救い主の誕生を告げられて、訪ねてきました。彼らの服は一年中野原で羊の世話をしているために、汚れて臭かった。普通の民家でも嫌われて、内に入れてもらえなかったでしょう。家畜小屋でしたから飼葉桶の救い主にお会いできたのです。神を讃美して戻って行きました。

もしも都の王宮で救い主が誕生していたら、羊飼いたちは近づくことが出来ませんでした。豊かな者にだけ囲まれた救い主で終わったでしょう。三人の博士たちは、遠い東の国からやって来て、この貧しい救い主に高価な贈り物を献げて拝みました。豊かな者でも謙遜な心さえあれば、貧しい姿の救い主に会うことができたのです。

貧しいマリアもヨセフも、ささやかな幸せを願っていました。でも神の御心を示された時、自分の願いを捨てて、もっと貧しくなる決心をしたのです。すると、神のお役に立ちながら、幸せに生きていけました。神の道には、備えがあるのです。

森の中に見捨てられた小さな曲がったモミの木のそばで、自分を暖かく引き取ってくれたアーネストおじさんと一緒にクリスマスをお祝いしたいと願ったセレスティーナ。小さな者、弱い者、病んでいる者に寄り添ってクリスマスを祝う幸せを教えています。

そうです。神さまの御心ならば、自分のささやかな願いを捨てて、貧しくなる心を持てたら、身の周りを思いやる事が出来ます。それがやさしい社会を造り出していくことになるのではないのでしょうか。

“主は豊かであったのに貧しくなられた。主の貧しさによって  
豊かになるためです” 聖書